

イザヤ書2章1-5節 「平和の国」

1A 主の与えられる幻

1B 終わりの日

1C 国々の戦い

1D イエスのオリーブ山預言

2D イエスへの天における賛美

2C 高くそびえる主の家の山

1D 山における主の教え

2D 清められたエルサレム

3C 主の裁き

1D イエスの戦い

2D 小さき者への心

2A キリスト者への挑戦

1B 先行する御国の幻

2B 平和を造る者

本文

皆さんと共に読む聖書の箇所は、イザヤ書 2 章 1 節から 5 節です。

1 アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて示された先見のことば。2 終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。3 多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。4 主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。5 来たれ。ヤコブの家よ。私たちも主の光に歩もう。

1A 主の与えられる幻

これは、イザヤという人に対して神が与えられた幻です。彼は、紀元前八世紀から七世紀にかけて、ユダの国に対して語った預言者でした。時は、ウジヤという人が王でした。ユダの国は彼のすぐれた知恵と力によって、強い国になっていました。そしてウジヤ自身、主なる神に従う良い王様でした。けれども、その時でさえ国の中に不正があり、争いがありました。神殿でいつものようにいけにえを捧げていましたが、それは人の生活を変えることがなく、形だけのものになっていました。そこで主は、イザヤをこの国に遣わされたのです。ユダの国がこのままの姿でいれば、アッシリヤという超大国によって滅ぼされてしまいます。

そこで悔い改めて、主に立ち返るために、神が御言葉を、イザヤを通して与えられました。その預言は、まるで嵐が襲ってきたかのような激しい言葉でした(例 1:4)。けれども、その激しさの中で、主は、まるで台風の目の中にユダとエルサレムを入れたかのように、輝かしい、大いなる希望の幻を与えられたのです。それが、私たちが今、読んだところです。それは、終わりの日の幻でした。エルサレムが他の山々よりもさらに高くそびえ立ち、そこで主ご自身が言葉を与える幻です。そして、なんと世界のあらゆる民がその教えを聞きにきます。そして、その教えによって、諸国の民が戦うことをやめて、平和が世界に満ちるところの幻です。

もちろん、目の前の問題は変わっていません。相変わらず、ユダの民は罪と不義を行なっていました。そして状況は、これからもっと悪くなります。それでも、神はご自身がエルサレムを絶対に建て直すのだ、という情熱を持っておられました。彼らに対して激しい言葉で悔い改めを迫ると同時に、ご自身が持つておられる強い意志をご自分の民に示されたのです。

1B 終わりの日

私たちが、キリスト者としてこの地に生きる時に必ず必要なのは希望です。幻、ビジョンです。教会において、このことが多く語られます。けれども、私たちは自分たちが思い描くビジョンではなく、神ご自身のビジョンを持つ必要があります。私たちが願うこと、こうなったらよいと思う希望的観測は必ず裏切られます。なぜなら人間は罪深いからです。理想を掲げても、それをことごとく裏切る、悪い性質を私たち人間は持っているからです。イザヤの後で現れる預言者はエレミヤでした。彼は偽預言者と対決しなければいけませんでした。大多数の預言者と呼ばれる者たちは、バビロンからユダが救われるという預言を行ないました。しかし、主は「その言葉は彼らの勝手な思いであり、わたしが与えたのではない」と断言されました。私たちがしっかりと抱かなければいけないのは、この聖書、神の靈感によって書かれた言葉であります。

ですから、今、私たちが読んだところの幻は神ご自身のものであり、私たちがしっかりと心の奥底に宿らせることのできる幻であります。これは、終わりの日の世界の国々の姿です。もちろん私たちの三国、中国と韓国と日本も、これらの国々の中に入っています。互いに争うことを放棄することが、神の確実なご計画なのです。

そして、これは主ご自身が与えられる平和であることに注目してください。主の家の山から教えが出て、主が世界の国々を裁かれるので、与えられる平和であります。具体的には、主が再臨されてこの地上に神の国を建てられることによって、もたらされる平和であります。私たちキリスト者は、終わりの日の幻をなくして生きることはできません。主が戻ってきてくださるという強烈な待望なくして、生きることはできません。初代教会のキリスト者たちは、挨拶をするときに「マラナタ」と言いました。それは、「主よ、来てください。」という意味です。そしてイエス・キリストご自身が、「御国が来ますように」と祈りなさいと命じられました。

1C 国々の戦い

1D イエスのオリーブ山預言

イエス様が世の終わりの時について語られたのは、オリーブ山においてでした。そこで世界は大きな試練の中に入ることを予告されました。「人々が大ぜいつまづき、互いに裏切り、憎み合います。…不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。(マタイ 24:10,12)」いかがですか、みなさんもつまづくことがたくさんあるかと思います。そして自分のうちにある愛が冷えてしまう、という試みを受けているのではないかと思います。そしてイエス様は、こう言われたのです。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。(マタイ 24:7)」いかがでしょうか、このことが実に今、私たちの世界で起こっています。

私は第二回の大会で、つまり去年(2012年)の1月2日の大会で、このことを話しました。私たちの民族同士の対立、国同士の対立はますます大きくなるということを話しました。もちろんそうあってほしくないのですが、私はもっと状況は悪くなると話しました。いかがでしょうか、2012年に中国と日本、韓国と日本の関係はすっかり冷え込んでしまいました。残念ながらその通りになったのです。

2D イエスへの天における賛美

けれども、お伝えしたいことがあります。私たち夫婦は、中国人と韓国人のクリスチャンとの交わりはますます深められていくのです！国においてはますます敵対していく中で、教会はますますキリストの愛によって熱く結ばれ、一つにされていくからです。そのように神が計画されているからです。

終わりの日に起こることとして、天において、鮮やかな幻を神は私たちに示してくださっています。これも第二回の大会のときに分かち合いました。「彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。(黙示 5:9-10)」よろしいですか、天においては中国人だけが、中国語で神を賛美しているのではないのです。韓国人が韓国語で神を賛美しているのではないのです。そしてもちろん日本人だけが日本語で主を賛美しているではありません。けれども、私たちはこの地上で礼拝を守っている時に、どれだけ他国の兄弟姉妹と交わっているでしょうか？それは天の姿ではないのです。

天においては、あらゆる部族、あらゆる国語、あらゆる民族、あらゆる国民によって神とキリストを賛美しているのです！そして、私たちが堅く結び合せているのは、私たちの罪のために血を流してくださった、小羊の血なのです。私たちがへりくだって、自分がいかに罪深いか、そしてこんな自分のためにキリストが血を流して私たちが解き放ってくださった、この感動と感謝が私たちが結びつけています。神はこれからますます、キリストが流された血によってますます私たちが結び

つける働きを力強く行なわれるのです。

2C 高くそびえる主の家の山

そしてイザヤの見た神の幻に戻りましょう。2 節には、「**主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち**」とあります。国々が争うことをやめて、平和が地上に満ちるため主が初めに行なわれることは、地殻変動です。エルサレムのシオンの山を周りの山々よりも高くさせます。それは主ご自身が他のものよりも高く引き上げられるためであります。他の王たちよりも、この方が高いところにおられることを示すためであります。

私たちに争いがあるときは、いつも決まってキリストが低められている時です。この方がすべてのことにおいて第一の方となられているときに、私たちの間にも平和があるのです。この方がどのように第一の方なのか、使徒パウロはコロサイ書 1 章でこう語っています。「**なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。(コロサイ 1:16-20)**」このようにこの方が第一になられているとき、すべてのものの和解が実現します。

1D 山における主の教え

具体的には、シオンの山において神の家からイエス様が御言葉を教えられます。それを世界から主を礼拝しに来る人々が聞きに来るのです。興味深いことに、神は歴史を通じて、山においてご自分の言葉を与えられました。旧約時代においては、シナイ山です。主はモーセを山に上らせて、ご自分の律法をことごとく与えられました。そしてイスラエルの民はふもとで十戒についての神の声を聞きました。

もう一つ代表的な出来事は、山上の垂訓です。荒々しいシナイとは打って変わって、のどかなガリラヤ湖畔の山において主は座って、弟子たちに「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。(マタイ 5:3)**」とお語りになりました。つまり、旧約においても、新約においても、山というのは権威と力を表しており、そこで語られる神の言葉も権威と力を持っている、ということでもあります。興味深いことに、ヨーロッパにある宗教改革の時の教会の説教壇は、非常に高いところにあります。なぜかというと、説教者の語る神の御言葉が高められるためです。御言葉に権威と力があることを示すためでした。

そして終わりの日の諸国の民も、主の語られる言葉に期待していました。3 節にこうありますね、「多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。」御言葉への期待が、私たちを一つにまとめるのです。

そして神の御言葉に権威と力があることを受け入れるためには、聞く者たちがへりくだらなければいけません。すでにイスラエルの民と、イエス様の周りに集まっていた弟子たちには、へりくだりの心が与えられていました。イスラエルの民は、エジプトにおける圧制から抜け出たばかりです。彼らは小さく、弱い民であり、つい最近まで奴隷の身分でありました。そしてイエスの弟子たち、そのガリラヤ地方の人たちは、ローマの圧制の中であえいでいました。このように社会的にも貧しく、苦しい民だったからこそ、主ご自身の救いを受け入れやすかったのです。

2D 清められたエルサレム

ところが、イザヤの生きていた時代はそうではありませんでした。イザヤ書を読みますと、ユダには主に四つの問題がありました。一つは、「豊かさの中における高慢」です。2 章 7 節には、こうあります。「その国は金や銀で満ち、その財宝は限りなく、その国は馬で満ち、その戦車も数限りない。」ユダとエルサレムには金銀が満ちて、そして軍事力も増していました。そのために、彼らは主の教えを受け入れることが馬鹿馬鹿しくなっていました。お酒を飲んで酔っ払い、なんと祭司や預言者たちまでが酔っ払っていました。そして、主の言葉を教えるイザヤをこのようにあざけたのです。「彼はだれに知識を教えようとしているのか。だれに啓示を悟らせようとしているのか。乳離れした子にか。乳房を離された子にか。彼は言っている。『戒めに戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、あそこに少し。』と。(28:9-10)」

なぜ国々が争うのか？それは豊かになって高慢になるからです。そのような国では、キリストの福音を語ってもなかなか伝わりません。日本で福音宣教が難しいのは、豊かで安定した社会があるからです。だから神が必要だと感じないのです。けれども、興味深いことに、地震と津波の被害を受けた地域では、トラクトを配っても受け取ってくれます。福音を語っても、それを聞くだけの余裕をもっておられます。アメリカでも、福音への飢え渴きを感じているところの一つは牢屋です。囚人の間では数多くの方がイエス様を信じて、受け入れています。心が貧しくされているのです。

二つ目は、ユダにおける問題は「流血」でした。「主は公正を待ち望まれたのに、見よ、流血。正義を待ち望まれたのに、見よ、泣き叫び。(5:7)」多くの国々は他国と争う前に、実は自国の中で争いがすでに起こっています。私たちは、殺人事件や凶悪な犯罪を国内で多く見るときに、その不安が国外へと駆り立てられるのです。

そして三つ目は偶像礼拝です。これもユダの国ではいっぱいになっていました。「まことに、あなたは、あなたの民、ヤコブの家を捨てられた。彼らの国がペリシテ人の国のように東方からのト者

で満ち、外国人の子らであふれているからだ。(2:6)」主の言葉がないがしろにされる中で、今度は周りの国々で行っている占いや異教の儀式に魅力を感じるのです。木や石だけでなく、いろいろな形の偶像が私たちにはありますね。主にしか埋められない空洞を他のもので必至になって埋めようとしています。

そして四つ目は、形式的な礼拝です。なんと、これらの問題があったにも関わらず、神殿における礼拝だけはしっかりと行っていました。教会生活と礼拝という外側の行いがしっかりしているから、その国は豊かになっているのだと考えたら大間違いです。主は、ユダの人々に対してこう言われています。「もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙・それもわたしの忌みきらいのもの。新月の祭りと安息日・会合の召集、不義と、きよめの集会、これにわたしは耐えられない。(1:13)」私たちは、御言葉の權威を守ることなくしてなおかつ、教会が発展するということはありません。生活に変化のない教会活動こそ、主の忌み嫌われるものです。

しかし、主はこれらのユダの悪を清められます。金や銀を精錬する時に火を通すように、ユダを火を通して試されます。けれども、それによって残された民がへりくだって主を待ち望むようになります。そして主は彼らを贖ってくださるのです。

3C 主の裁き

そして4節に注目してください。「主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。」とあります。主が国々を裁かれるので、国々は平和を学びます。イザヤの預言では、高慢になったものをへりくだらせるために、主ご自身が彼らに立ち向かわれます(例:2:10-11)。

1D イエスの戦い

イエス様は、この地上に再臨されるときに、全世界の軍隊と戦われます。黙示録19章後半に、その輝かしい、力ある主の姿を読むことができます。「この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。(15節)」人間は愚かな者です。全能者である神に対して、最新兵器をもって戦うことができると思っています。人は、物質をもって神に対抗できると思っています。その愚かさを明らかにするのが、神の御言葉によって人の武器をことごとく無力化する再臨の出来事なのです。

2D 小さき者への心

そしてイエス様は、御座に着かれて世界の諸国をお裁きになります。マタイ25章に書かれていますが、羊と山羊をえり分けるように諸国の民を分けられるのです。羊とされた者、御国の中に入ることでできる者たちは、どのような者ですか？そうです、「すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』(マタイ25:40)」苦しんでいる人、弱っている人、

貧しい人、そのような人に心を留めていた者たちを御国へと招かれます。

いかがでしょうか、私たちが終わりの日の幻を持っているのであれば、私たちの目は自ずと弱っている人に向きます。それはもちろん、物質的にだけでなく、精神的にも、霊的にもその通りです。何か働きかけようとしているのでしょうか？このことを行なえば、そこには平和があります。平和は私たちの意見の調整によってもたらされるものではありません。平和は、相手の重荷を担おうとするところにもたらされます。相手の弱さ、相手の苦しみ、相手の祈りに共感して、そこにおいて神に仕えるところに平和が来ます。「**私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。(ローマ 15:1)**」

2A キリスト者への挑戦

1B 先行する御国の幻

そして最後、5節をご覧ください。「**来たれ。ヤコブの家よ。私たちも主の光に歩もう。**」これはかなり皮肉な呼びかけです。終わりの日に、ヤコブ、つまりイスラエルの家ではない異邦人たちが、全世界の民がエルサレムにやってきて主の教えを受けています。そして世界中に平和が与えられます。けれども、肝心のヤコブの家は、主の幻に後追いしているのです。異邦人たちが主ご自身を知っているその姿を見て、イスラエル人たちも主の光の中を歩もうではないか、と呼びかけているのです。

私たちはここから挑戦を受けなければいけません。主の平和の幻はすでにあるのです。主は、それを確かに推進しておられるのです。ところが眠ってしまっているキリスト者がその幻があることに気づいていない、という現象が起こるのです。主の働きはどんどん進んでいるのに、肝心の信仰者がまだ気づいていないということが起こります。使徒行伝を思い出してください。異邦人への宣教は誰が気づきましたか？ステパノが殉教したからエルサレムから聖徒たちが出て行きました。自分たちで気づいたのではないのです。ペテロが百人隊長コルネリオのところに行くときは、彼はかなり戸惑っていました。主がそれで三度も幻をお見せになったのです。そして異邦人への宣教に召されていたパウロであっても、彼は小アジアでの宣教で満足していたところ、御霊が禁じられて、マケドニヤの男の幻をお見せになったのです。それでヨーロッパに行ったのです。ですから、これから私たちが平和を造るではありません。すでに神の平和の国は存在するのです。それを、私たちがいつになったら悟って、その働きの中に入ることができるのか？ということなのです。

2B 平和を造る者

いかがでしょうか？平和を造るにはどうすれば良いでしょうか？キリストを第一にすることです。御言葉の権威と力を高くすることです。そして、弱き者に心を留めることです。そして、これらの教訓がすべて含まれている、主の再臨の希望と幻を心に留めることです。